桃の種は語る「狗奴国は吉備邪馬台国を手に入れた」

川上　郁夫（会員番号　１０３３８）

紹介文

纒向遺跡から発見された桃種の年代測定結果が西暦１３５年～２３０年と発表された。であるならば、約１万個の桃種が発見された倉敷市の上東遺跡こそが邪馬台国であり、纒向遺跡は狗奴国と考えられる。

１　記紀の不思議な記事「味方であるはずの吉備を攻略？」

古事記、日本書紀の記事を読んで、矛盾を感じたことがあります。

神武東征の記事の中で、神武天皇が日向を出発し、岡田宮（福岡県遠賀川付近か）、埃宮（広島県府中町か）、そして吉備の高島宮を経て畿内大和攻略に成功しているのに、なぜその後、大吉備津日子命による吉備攻略に関する記事（古事記　第７代孝霊天皇）や、四道将軍の吉備津彦命が西道に派遣された記事（日本書紀　第１０代崇神天皇）が載せられているのか、ということです。

神武天皇は吉備の高島宮には３年（日本書紀）または８年（古事記）滞在したとあり、吉備は東征時点から神武天皇に従っているのに、なぜその後攻略しなければならないのか？

神武東征はなかったとか、四道将軍はなかったという考えで解決することはあまりにも安易だと思います。

逆に、ここに日本古代史を解くカギがあるのではないでしょうか。

２　大量の桃種が発掘された２つの遺跡

（１）纒向遺跡

邪馬台国新聞第７号（2018 年 5 月 31 日発行）の冒頭に、纒向遺跡の桃種の記事が掲載されました。

それによると、2010 年に纒向遺跡で発掘された桃種 2769 個のうち名古屋大学測定の 12 個は、西暦１３５年から２３０年を示したということです。

（２）上東遺跡

１つの遺跡からの大量の桃種の発掘例は、纒向遺跡以外にも、岡山県倉敷市の上東遺跡で 9608 個という例があります。（岡山県古代吉備文化財センターのホームページより）

なお岡山市の津寺遺跡で 2415 個という例もありますが、ここでは省略します。

上東遺跡の桃種の年代測定は行われていませんが、この遺跡は弥生時代後期

に栄えた時期があります。
　また、これらの遺跡以外で２０００個もの桃種が発掘された例を私は聞いていません。

（３）大量の桃の種と土器の移動が示すこと

　上東遺跡、纏向遺跡とも、邪馬台国時代に、他に類を見ない大規模な祭祀が営まれたということであり、両遺跡とも、国の都に違いありません。
　また、九州、山陰、畿内の特徴を有する土器が津寺遺跡、上東遺跡から出土すること（岡山県古代吉備文化財センターホームページ「意外に多い土器の移動」より）、そして纏向遺跡で外来の土器の占める割合が比較的高いことも、都であることを示しています。

３　魏志倭人伝、後漢書東夷伝の記述

（１）「倭国乱れ」とは大国どうしの争い

　魏志倭人伝や後漢書東夷伝によれば、卑弥呼が共立される前に、倭国が乱れたという記事があります。
　乱れた時期は、後漢書東夷伝によれば桓帝・霊帝の間で２世紀後半です。
　そして、乱の終了後、女王卑弥呼が共立され、卑奴母離や一大率などの地方統治組織が整備されました。
　魏志倭人伝では卑弥呼に従う国が約３０カ国列挙されています。これらの国々をまとめあげた倭国の乱の内容はどのようなものでしょうか。
　隣の集落どうしの争いではなく、約３０カ国中の奴国（２万戸）、投馬国（５万戸）、邪馬台国（７万戸）といった当時の大国どうしの争いと考えるべきでしょう。（かっこ内は魏志倭人伝に記述される戸数）
　戸数が正しいかどうかはさておき、魏志倭人伝においてこの３国のみが万単位の戸数を有し、大国であることは間違いないと思います。

（２）大国の所在地、「倭国乱れ」の原因、そして争いの構図について

　この３大国は、倭国のどのあたりにあったのでしょうか。
　奴国は金印の出土から考えて北部九州博多湾沿岸で間違いないでしょう。
　投馬国は諸説ありますが、発音が似ていること、大国であることから、妻木晩田遺跡等の大規模遺跡が存在する出雲と考えます。
　邪馬台国は、これも当時の大国であるはずです。ここでは吉備とします。
　争いの原因は何でしょうか？
　５７年に奴国が後漢王朝の光武帝から金印を授与され、倭国の王と認められたこと、そして１０７年の倭国王帥升の後漢王朝遣使があったことを考えると、２世紀初め頃から、中国王朝や朝鮮半島との外交及び鉄などの交易の権利を賭けた倭国の代表権争いが始まったと考えています。

争いの構図は、北部九州ＶＳ出雲・吉備・畿内大和連合かと思います。

出雲（荒神谷）と淡路島（松帆）の同范銅鐸が存在すること、瀬戸内海に多数存在する高地性集落遺跡から考えて、出雲・吉備・畿内大和は友好関係にあり、北部九州に対抗していたと思われます。

（３）中間のまとめ

以上のことから考えて、魏志倭人伝、後漢書東夷伝は、北部九州、出雲、吉備を含む諸国が、２世紀後半に戦乱となり、最終的に統一され、卑弥呼が共立されたことを述べているのです。

そして、これらの３大国は、名前を変えて記紀に現れます。それも、戦乱という形をとっています。

この記紀の戦乱の記述こそが、魏志倭人伝の「倭国乱れ」、後漢書東夷伝の「倭国大いに乱れ」に相当するものと考えます。

４　記紀の記述

（１）出雲の「国譲り」と銅鐸埋納

北部九州、出雲、吉備等を含む諸国の戦乱の記事は、記紀にもあります。

まずは、出雲が攻略された記事です。皆様ご存知の「国譲り」です。

古事記によれば、高天原から派遣された建御雷之男神が建御名方神を力比べで破ったのち、大国主命が国譲りに同意するという話になっており、武力衝突の結果、出雲は敗れたことを示唆する内容です。

「国譲り」は「神武東征」以前の記事ですから、攻め込んだ高天原勢力は、九州在住に違いありません。

その正体は奴国の後継勢力で、北部九州に勢力を持っていたと考えられます。

そしてこの国譲りのときに、出雲の銅鐸や銅剣が埋納されたものと考えます。

青谷上寺地遺跡の大量の受傷人骨は、もしかするとこの時の戦いの犠牲者だったのかもしれません。

武力衝突の結果は、北部九州勢力の圧勝だったと思われます。

（２）神武東征と高地性集落

記紀では国譲りの後に天孫降臨があり、舞台は名実ともに九州となり、主人公は神武天皇になります。

記紀には神武天皇が吉備を攻略した記事はありませんが、東征の際、北部九州の岡田宮を出発した神武天皇は、吉備の高島宮に 3 年あるいは 8 年滞在したとあるので、少なくともこのときまでに吉備が東征勢力に従ったのでしょう。

武力衝突を避け、破壊を避けたことが、後に女王の都するところに選ばれることにつながったのでしょうか。

吉備が東征勢力に従ったことで、瀬戸内海沿岸の高地性集落が終わりを迎え

たと考えます。

（３）東征完了

そして神武東征は、倭国の乱の総仕上げでもある畿内大和攻略に移ります。

日本書紀の記述では、出雲の時とは正反対に大苦戦し、孔舎衛坂で長髄彦に敗れ、熊野へ迂回して北上した後に再戦しても勝てない状況でしたが、畿内大和勢力の仲間割れで強硬派の長髄彦が排除され、穏健派である饒速日が帰順し、辛くも勝利を得ました。

余談ですが、帰順した饒速日側が重く用いられ、物部氏というナンバー２の地位を獲得します。

ここにおいて、魏志倭人伝と記紀の結果が一致しました。北部九州から畿内大和までを含む大国が成立したのです。

５　大国は分裂し、再統合へ

（１）大国の分裂

神武天皇が吉備を根拠として畿内大和を攻略し、北部九州勢力は敵対勢力の一掃に成功しました。

この結果、中国王朝や朝鮮半島との外交や交易は思いのままとなりました。

そして、都は大国のほぼ中心の吉備の上東遺跡とし、盛んに桃の祭祀を行ったのでしょう。

このあと、この大国が西の邪馬台国と東の狗奴国の２国に分かれたことは魏志倭人伝、記紀とも書かれていませんが、上東、纏向両遺跡の大量の桃種の存在、魏志倭人伝にいう邪馬台国と狗奴国の交戦、記紀の吉備攻略の記事から考えて、間違いないでしょう。

（２）分裂の理由

分裂の理由は、都の位置をめぐる北部九州勢力と東征勢力の主張の相違と考えています。

北部九州勢力は、敵対勢力の一掃という目標を達成し、急速に拡大した国を統治するための組織づくり及び倭国内交流の活発化を急務と考えたのでしょう。

国の中心部に位置し、壱岐の原の辻遺跡のような港湾施設を有し、乱の影響を受けなかった吉備の上東遺跡を都に選び、祭祀及び交流の拠点としたと考えられます。

一方、東征勢力側は、畿内大和に都を置くことを主張したのでしょう。

東征出発前から畿内大和遷都を考えていたという日本書紀の記事は、先見の明がありすぎ、いささかオーバーな内容だと思いますが、この記事から思うに、どこかの時点で畿内大和遷都を考えていたのでしょう。

畿内大和を手に入れ、東海北陸地方が目の前にあるという現実があり、畿内

大和を根拠として「もっと東へ」という考えが東征勢力の間では支配的だったのでしょう。

　これは、記紀に後に現れる「日高見の国」という概念に通じるものです。

（３）再統合へ

　東征勢力は纏向遺跡を都として独立し、狗奴国すなわち大和王権となり、桃の祭祀を開始し、後に吉備に攻勢をかけ、完全に手に入れたのでしょう。

　このことは、大吉備津日子命による吉備攻略に関する記事（古事記　第７代孝霊天皇）や、四道将軍の吉備津彦命が西道に派遣された記事（日本書紀　第１０代崇神天皇）にあるとおりです。

　結びに、私の「邪馬台国論」「古代史論」に寄稿された若井正一さん、岡將男さんお二人の着眼点が、私にとって古代史の流れを整理するきっかけとなりましたことを申し添えます。

自己紹介　川上　郁夫（かわかみ　いくお）
　１９６３年生まれ　神奈川県在住

　弥生時代、古墳時代の人々は何に突き動かされてムラからクニを作っていったのか。魏志倭人伝や記紀の記述は当時の日本人のエネルギーを感じさせます。